

あいち国際女性映画祭で人気

生の記録 劇場デビュー

今秋の「あいち国際女性映画祭」で人気を集めた自主製作ドキュメンタリー映画「空想の森」が、名古屋・名駅のシネマスコーレで1月10日から上映される。北海道で野菜作りや酪農を営む入植者たちの日常の記録だ。監督はこれがデビュー作の田代陽子さん41歳。場所と人との出会いに促されて映画づくりにかかわり、30代のほとんどをかけて完成させた力作だ。

(佐藤雄二)



「空想の森」の一場面

「空想の森」監督、30代の大半費やす

来月、名古屋

北海道のほぼ真ん中にある新得町は森の町だ。東京の半分の広さがある町の9割を森林が占める。「空想の森」は、その町はずれの入植地で農業を営む夫婦2組の仕事ぶりや暮らしぶりを軸にした、地に根をおろした生き方とそれを可能にしている場所についての記録である。

同じ場所に暮らし、長い時間をかけて、撮られる側とのあいだに築いた信頼関係が、映画を完成させた。撮影期間は実質1年だが、野菜づくり16年の山田さんや有機農業に取り組んで30年の宮下さん

入植者の営み追う

らが日々感じている苦勞や喜びを、この映画は十分にしのばせる。

あれこれの農作業の様子ではなく、それによって成り立っている暮らしの全体に、田代監督は迫ろうとしている。それこそが、彼女を感動させて映画を撮らせたものだからだ。人生の転機となった映画祭の様子も、しっかり記録している。

何を強調するわけでもない淡々とした映像が見ていて心地よい。「空想の森」は、柔らかな日差しを浴びる新得の雪と土の上に私たちを連れ出す。



田代陽子監督

田代さんは東京生まれ。都内の大学を中退し、北海道帯広市のタウン誌で働いた後の96年、近くの新得町であった「第1回空想の森映画祭」を見に行ったのが転機となった。

新潟水俣病患者を描いた「阿賀に生きる」(佐藤真監督)に

衝撃を受けた。上映後、それを撮影したカメラマンの小林茂さんがフィルムを見せてくれた。初めて触るフィルムを窓にかざし、自分を感動させたものを確認

かめた。

主張を押しつけられそうで嫌だったドキュメンタリー映画の面白さを知った。手作り映画祭を楽しむ農家の人たちと出会うこともできた。そして、新得町で映画を撮りながら地元の人たちと映画祭を立ち上げた藤本幸久監督(三重県四日市市出身)のスタッフになった。

藤本監督の2作品、「森と水のゆめ」と「闇を掘る」の撮影や編集を手伝ううちに自分の作品を撮りたくなり、00年から準備を始めた。何を撮るかを決めていた。本州各地からさまざまな経緯で新得町に移り住み、家庭を持ち、農業で暮らしている同世代の女性たちだ。

02年、4人でチームを組み16日フィルムで撮影を始めたが、思うように進まないまま翌年になって資金は底をつき、チームは分解。自分も手術を要する病気になる。05年2月、録音担

当と2人で撮影を再開した。費がかさむフィルム撮影を断念し、20万円で中古ビデオカメラを買った。現地に何度も泊まり込み、06年2月、ようやく撮影を終了。100時間に及ぶテープを編集し、129分の最終版ができたのは08年3月だった。

完成直後、新得町公民館で開いた完成披露上映会には500人の町民が集まった。9月の「あいち国際女性映画祭」では1回だけの上映に定員300人の大会議室が満員に。ドキュメンタリー作品としては異例の人氣ぶりにスタッフが驚いた。

海外の映画祭に出せるように英語字幕版「Smell of Sunshine (日差しのおい)」も用意したが、当面は自主上映を中心に全国を回る。

シネマスコーレでの上映は16日まで毎日午前10時半から。初日に舞台あいさつをする。